現代社会を『関係性』という観点から考える㊲

「呼び名と役割」そして「関係性」

更生保護官署職員　三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

今回は標記について私見を述べさせていただきます。

「現代社会を『関係性』という観点から考える」というテーマでの連載です。これまでの連載一覧については末尾に記載しています。

1 「呼び名と役割」について

公私様々な組織・グループ内部におけるお互いの「呼び名」については、「姓＋肩書」「姓＋さん」等、グループの性質や親密度、公私の別によって様々なものが考えられるでしょう。

幼稚園・保育園の子どもを育てている方が、親御さん同士で「〇〇ちゃんママ」と呼びあう場面に私が初めて接したのは、中脇初枝さんの短編集『きみはいい子』(2012年　ポプラ社)収録の「ぺっぴんさん」でした。子どもを愛しく思いながらも手をあげてしまうことを母親の視点からの描写は息詰まるようでありながら、同じ被虐待体験のある「はなちゃんママ」の飾らない吐露から少しずつ回復に向けての歩みが示唆されるラストが印象深い作品でした。

読了後、「〇〇ちゃんママ」という呼び方が、日常生活でも身近なものであるということに気が付きました。当初私は、「〇〇ちゃんのママ」から「の」を一字を抜いただけの「〇〇ちゃんママ」という呼び名は、「ママ」という役割以外の多様なものから構成されている1人の人を、「ママ」という役割に押し込めてしまうような窮屈さも感じていました。ただし、「〇〇ちゃんママ」という呼び名が、「あくまで保護者同士(ママ友)同士の関係性のなかでのものである」ということを、呼ぶ側も呼ばれる側もある程度自覚的である、つまり割り切っているという点も多くあるのかもしれません。

家庭や家業における役割をもってして、「〇屋の看板娘」「〇家の大黒柱」「〇〇会社の二代目・若旦那」等と称することは古くからあります。今となってはやや時代がかったものに感じられる向きあるかもしれません。呼ばれる相手に対する敬意がそこに含まれ、かつ、そう呼ばれる(対外的に称される)当事者の同意があれば、支障ないとされてきたのでしょう。

しかしながら、主たる生計維持者(でありかつ妻等に鷹揚に金品を渡すことができることを想定されている者)を、「大黒柱」ではなく「ATM」といった即物的な表現をすることについては、自身でそれを用いれば相当に自虐的であり、相手にそれを用いることは敬意がなく品性に欠けるとも感じています。さらには、金銭的に依存傾向の強い家族メンバーが主たる生計維持者のことを「うちの財布だ」と公言するだけではなく、人前で「おい、うちの財布」と呼ぶことを重ね、家族内葛藤が深刻化してしまったという事態も、身近で体験しました。

ここからは私的な体験を述べさせていただきます。私の配偶者は、地方都市で古くから続く家の分家の出身であり、親族間ではお互いを、「〇〇(居住している集落の名称)の三浦」あるいは「●●(家業)の三浦」と呼びあうことが多くあります(親しい間柄や子供の場合

は名前＋くん・さん）。親戚関係が少ない環境で育った私は当初驚きましたが、その呼び名に過剰な意味づけはなされておらず、私自身もすんなりとなじむことができています。異動（転勤）を重ね様々な地域で勤務してきたため、こういったかたちだけで判断せず、地域の特性をよく把握し尊重したうえで、コミュニティーに参加させていただく重要性を知っていたことも大きかったと考えます。

「呼び名」に期待される役割等が含まれていることは、職業生活や様々な組織活動の場ではむしろ一般的です。組織における肩書がその最たるものでしょう。親族で営んでいる家業においても、お客さんを前にした場面では、肩書で呼び合い公私のけじめをつけておられるところも少なくないのではないでしょうか。地域や親族関係特有の呼び方も無論ありますし、役割が高じてそれが通常の呼び名となっている場合もこれに該当するかもしれません。

ただし、「呼び名でもって相手にその役割を押し付ける」「呼び名でもって自身をその役割に押し込める」ことについては、そこに軋轢が生じ関係性をゆがめてしまう必要があるため、注意が必要だと考えています。

２ 「おかあさん」という呼び名

私たち夫婦は、年齢的なことに加え、お互いが異動を重ねながら家族介護にも従事していたことを踏まえて、結婚当初から実子を持たない選択をしていました。別世帯で結婚生活をスタートさせたこともあり「家」に入るという感覚も特段ありませんでした。また、社会的養護を行っている団体の支援の端に長年加えていただいていたことで、実子を育てる以外の方法で次世代育成に関わっていきたいと考えてもいました。

前述したように、配偶者の実家は地縁血縁が重視される地域であり、本家・分家関係も濃密でしたので、配偶者の地縁・血縁やその関係性を尊重したふるまいが大切だとも考えていました。そのため、こうした自分たちの「家族観」について説明することについては控えていました。しかし実際には、配偶者の家族はともかく、親族の方々は既に子世代、場合によっては孫世代の巣立ちを経験されている方が殆どであり、我々夫婦の結婚後の生活形態に驚かれはするものの、「結婚した以上～」「嫁たるものは～」といった内容のことを言われることはありませんでした。御自身の子ども世代に対してそれぞれ望まれることはあったとしても、「今の時代、そういったことについて軽々しく踏み込んではいけない」というスタンスのもと、それを親族内の年下の世代にもさらりと実践されていると感じました。

ただ、戸惑ったのは、「おかあさん」という呼び名でした。子どもの有無、育児中かどうかに関わらず、嫁や妻の立場の女性に対して「おかあさん」と呼びかけることはごく一般的なことでした。私は当初自分が呼びかけられていることに気づかないことが少なくありませんでした。「おかあさん」は「あなた」「あんた」よりもより親しみがありつつも丁寧な感じで、家のことを取りしきる女性を刀自（様）と呼ぶ地域や時代もあったことにやや近いのか？とも感じました。

こうした「おかあさん」達を身近に拝見していると、家庭生活や家業を維持するための様々な諸手続きを担い、冠婚葬祭はじめ地域社会での各種のお付き合いにも目を配りつつ子育てや家事もこなしておられます。「仕事と家庭の両立」のために様々な施策が導入され私自身もそうした施策の支えがあって家族介護を乗り切れた部分が多々ありますが、「おかあさん」がなさっていることは、「仕事との両立」以外のスキルを必要とし、かつ、地域性も熟知する必要があります。特に冠婚葬祭については、お寺さん関係（檀家さん含む）や親族内

での立場や役割を踏まえ、かつ、過去の状況を鑑みた対応が求められることも多々あります。こうした諸々のことについて、「本家の奥様」や先輩方に当初の段階からお教えいただいたことで、冠婚葬祭の際には何かと力が入りがちな配偶者が前に出過ぎることを防ぐなど、役立つ場面が多くありました。

私自身は自分が自覚的に家庭を運営していこうと考えている場面において「おかあさん」と呼ばれることについては、特に負担を感じることはありませんでした。介護帰省等のため、勤務先から新幹線で配偶者のもとに向かう際、車中でさりげなく「おかあさんスイッチ」を入れる、つまり、気持ちを切り替えているという感覚もあります。ただし、家業に従事するなどし、オンオフの切り替えが難しい状況で、「おかあさん」と呼ばれ続けることはつらいだろうと考えます。

令和8年3月に公開された山田徹監督のドキュメンタリー映画「三角屋の交差点で」においては、「おかあさん」という呼び名が様々に注目されていました。90代の高齢者を抱えて原発事故で避難する御夫婦の姿を追ったものでしたが、義母からも夫からも「おかあさん」と呼ばれ、家事や介護、避難に関わる細々としたものをこなし、休むことなく手を動かしておられる「おかあさん」の姿は、介護から逃げがちなように見える夫との姿と相まって、日本社会の縮図だという意見も寄せられていました。

映画「三角屋の交差点で」は、震災被害の観点からも家族介護の観点からも示唆に富むものであり、またこちらで考えを述べさせていただければ幸甚です。

3 「嫁」「お嫁さん」という呼び名

一方で、「嫁」「お嫁さん」という「呼び方」～私にとっては「呼ばれ方」についてですが～については、私はそれがどのような状況での「呼び方」「呼ばれ方」なのかによって、常に意識せざるを得ない面があると考えています。

私は、家族介護の経験が長いことや社会福祉士等の資格を有していることもあり、同僚や友人から介護に関する相談を受ける機会が多くあります。配偶者からは特にその相談の機会が多くまた長きにわたっており、結婚を契機に私も家族介護当事者の1人となったという経緯もあります。

結婚当初の時期の主たる要介護者は義父でしたが、義母もまた疾病等の特性で、家族や支援者の関わりが難しくなる場面が少なくありませんでした。こうした状況において、私が嫁ポジションで家族介護に参加することは、ちょっとした相違が家族関係の軋轢に発展しかない危うさがあることはすぐに見て取れました。まら、そうした出来事を特に支援者側から、「嫁姑あるある」と見なされてしまえば、状況が一気に下世話かつパーソナルなものとされてしまい、家族介護における本来の課題は看過されてしまう危険性があるとも考えました。

そのため、義母に対して人として尊重することはもちろんですが、ケア環境の改善その他のために必要な場面では、あえて状況を外在化し、感情的にならず根拠を持って冷静に行動するように心がけています。家族内の各種サブシステムがどのように機能しているのかについても留意し、嫁個人として介入するのではなく、援助専門職の視点を重視した見立てについて夫婦で話し合ったうえで、息子夫婦の総意として対応を行っています。

順調に物事が進んでいるときには問題ありませんが、義母が考えるように物事が進呈しない（ように見える）時には、「普通なら嫁が～すべき」「嫁のくせに～」と言われることも少なくありません。「嫁のくせに」という言葉は、非現実的な希望（本人及び周囲の人権や安全を考えると了解できないこと）に私が同意しない際、まずは力関係で優位に立とうとする際に

発せられることが多いため、そうした際には、「嫁のくせに」という言葉には一切触れることなく、できない理由を淡々と説明するように対応しています。その結果、感情的な軋轢で行き詰まっていた事態が、少しずつ動き出し、現実的な着地点を見出すにいたったことも少なくないと考えています。

4　支援者の「家族観」「役割期待」と「呼び名」

介護家族当事者となって30年以上になります。支援者から家族に対するコミュニケーションの在り方から、ケアプラン等には記載されていない、支援者の方個人の「社会に対する考え方」「家族観」が、実際の支援に強く反映されていると感じる場面もあります。私自身は、分野は違いますが対人援助職に分類される仕事に従事しているため、支援の技術を磨くだけではなく、自己覚知を深める時間をとることが重要であると先輩方に助言され、ワークショップなどにも参加していました。そこでは自身の「家族観」についても向き合う機会が多々ありました。

「家族は仲良く助け合うべき」という考え方は道徳的には尊いものですが、自身の支援にそれが無批判に反映されることは、相互の交流が断絶している家族、金銭的な援助や費用の負担は滞りなく行うものの面会等がない家族に対して、ケアプラン等に基づく助言ではなく自身の家族観に基づくお説教となってしまう危険性があると考えています。

義父を見送った後に本格的な義母の介護が始まりました。私は母の疾病特性を踏まえ、健康を害すると思われる品物や依存を深めトラブルに発展しやすい多額の金員の差し入れは控えていました。一方、義母の支援に関わる方からは、「お嫁さんはお姑さんの言うことに従うのがこの地方のやり方ですよ」という内容「助言」を一度ならずいただくこともあります。義母のことを考えてくださっている気持ちがよく伝わってくるものですし、地域性も熟知されているのだと思います。

嫁姑ポジションとなることがよい家族介護や支援につながらないと考えていることについてはその時々の支援者の方に説明をしていますが、しばらくすると「お嫁さんなら～」ということが繰り返されてしまいます。疾病の特性上、周囲を操作してしまう傾向の強い義母に巻き込まれてしまい義母の思いを代弁されていることも多いかもしれないと感じました。そのため、失礼だとは思いましたが、家族療法の視点を重視して義母に関わっていること、「お嫁さん」という「呼び名」ではどうしても役割期待前提の話となってしまうので、まず呼び名を変えていただくことをお願いしています。以後、私への呼び名は「お嫁さん」ではなく「三浦さん」となり、それ以降は、「お嫁さんだから」という助言が少なくなったと考えています。

たかが「呼び名」かもしれませんが、「家族の関係性」「家族療法での観点」を細々と説明するよりも、まずシンプルに形から入ることも重要かと考える今日このごろです。

参考

「きみはいい子」（ポプラ文庫　中脇　初枝（著））
映画：三角屋の交差点で　山田徹監督　配給・お問い合わせ：株式会社インプレオ

これまでの連載

30 号：連載 1：更生保護制度とは何か
31 号：連載 2：更生保護を支える人々
32 号：連載 3：つながる・つなげる　～現代社会とボランティアについて～

33 号:連載 4:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える（前）
34 号:連載 5:「共同体」における「排除」と「包摂」という関係性 「遠野物語」から考える（後）
35 号:連載 6:介護は誰が担うべきか～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
36 号:連載 7:対人援助の場面における「専門家」と当事者等との関係性について
～家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察～
37 号:連鎖 8:「地域」を支える縁のかたち　血縁・地縁，そして「新たな縁」
38 号:連載 9:「29 人と 19 人」～この数字が示すもの
39 号:連載 10:血縁あるいは家族について
40 号:連載 11:対人援助職が家族のケアを担うとき(1)
41 号:連載 12:対人援助職が家族のケアを担うとき(2)
42 号:連載 13:「開く」ことと「閉じる」こと
43 号:連載 14:『「開く」ことと「閉じる」こと』
44 号:連載 15:『つながりが支えるこころ』
45 号:連載 16:『「見える」ことと「見えない」こと』。
46 号:連載 17:「地域社会」との「関わり方」を考える
47 号:連載 18:「地域社会」で生きるということ
48 号:連載 19:「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ
49 号:連載 20:『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、50 号:連載 21:Society から Home へ矮小化していく社会
51号:連載 22:「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について
52 号:連載 23:自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ
53 号:連載 24:「知らないことが不安や排除につながる」ということ
54 号:連載 26:「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか
55 号:連載 27:「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものなのか」
56 号:連載 28「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へ（連載 29 と記載していますが 28）
57 号:連載 29「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」
58 号:連載 30 改めて「介護は誰が担うべきか 家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」
59 号:連載 31:非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」
60 号:連載 32:家族における「ケア」の在り方 映画「どうすればよかったか」から考える
61 号:連載 33:みまもり「みまもる」ということば
62 号:連載 34:「若者と薬物依存」について、地域社会でどう向き合うのかと
63 号:連載 35:薬物依存症当事者の方の経験と人生に触れる
64 号:連足 36:家族のなかの秘密と嘘　映画「どうすればよかったか」から考える・続